

『国際経営講義』

—多国籍企業とグローバル資本主義—

(ジェフリー・ジョーンズ著、安室憲一・梅野巨利訳、有斐閣)

原題：Multinationals and Global Capitalism From the 19th to the 21st Centuryを『国際経営講義』としたのは如何なる意図があったのか訳者はあとがきにも「書齋の窓・No.565」（有斐閣）のエッセイでもふれていない。著者がハーバード大学でテキストにしたと述べていることからなのであろう。このタイトルであったからこそ書店で手にすることになった。人文学部、商学部、不動産学部それも昼夜の学生に講義する身にとっては毎年テキストの選定は楽しみでもあり苦しみでもある。人文学部の学生に経営学への興味を喚起させ、商学部の学生を国際経営の虜にし、不動産学部の学生に国際マーケティングを開眼させ、夜間の実務家に興奮を齎すのは至難の業である。

この著作は将に悪戦苦闘している講師にとって素晴らしい手引書であり種本である、と言っては失礼であろうか。但し単なる経営書ではない。著者の学者としての姿勢と秘めたる正義感が迫ってくるのである。まず膨大な企業経営の史実に圧倒されうんざりもさせられる。然し第10章P357の「歴史は豊富かつ説得力有るデータを提供してくれるが多国籍企業の歴史はあまりにも長く、また企業ごとに異質な歴史をたどってきたため、過度に一般化することのないように注意を要する」を目にするや雷に打たれた思いに襲われ、著者の誠実さをたどるように最初から読み直した。

次にシルバーボランティア等で発展途上国、植民地支配されてきた国々で働く仲間達は現地で「如何にして下流国から脱皮するのか？ どうもがいても蟻地獄が続く」の問いに直面している。この本から彼等は多くのヒントと励ましを得るに違いない。

そして結末とも言うべき『過去と未来』（P412と413）において、世界の半分が貧困である事実、抑えても抑えても疼く正義感と失望感、それでも尚希望を見出そうとする著者の人柄に打たれるのは私ばかりではあるまい。

東洋学園大学人文学部 教授 平井 宏

※この記事は[社]日本マーケティング協会の許諾を得て転載しています。

著作権は[社]日本マーケティング協会に帰属。

記事、画像等の無断転載は一切お断りします。